



## 京都モノがたり— ②6

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。

見本用のはんこ。文字だけでなく細かな模様まで彫る。ケースは昔ながらの舟形。手彫りの木製の型に布を張ったもので、関東の職人による手作り。

# 京印章

印章は聖徳太子の時代に中国より伝わり、後に平安京が置かれた京都で御璽（天皇の印鑑）や官印などが作られたといわれている。江戸時代には日本初の印判師が京都で活躍。以降、印章の中心地として発展を続け、明治7年には京都の印判師が1年がかりで天皇御璽と国璽（国の印鑑）を制作している。いまでも国文書に使用されているこの御璽、国璽は、京印章である。

印章（はんこ）には篆書という古い書体がいられることが多いが、京印章は篆書のなかでも漢の時代の漢印篆と呼ばれる直線を基調とした書体を主に用いる。また、はんこの長さは60ミリが主流なのに対し、45ミリと短いものがあり、鞘（キャップ）付きが実印として好まれる傾向がある。古くは芸舞妓が着物にしのばせていた30ミリほどのはんこが作られていたことがあるなど、京都らしく“控えめ”なサイズも特徴といえよう。

## 印稿どおりに彫るために工程を重ねる

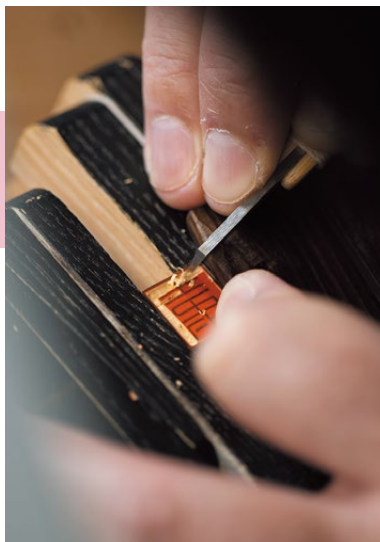
はんこは、まずサイズと印材を決め、印面をフラットに整えて朱墨を塗る。彫る前に印稿（下書き）を墨で書くため、細部まで見えるように朱を載せておくのだ。次が字割りといわれる、印稿どおりに字を書くための作業。印材は真円でないことが多く、中心を出すことが難しい。3か所から線を引き、交点からおよその中心を決める店が多いが、1860年創業・田中文照堂の5代目田中大晴氏は、自作の治具で十字から中心をとり、1ミリのグリッドを引く。グリッドの有無で印稿の再現性は大きく異なる。

ベースが整えば印稿に取り掛かる。書体や太さを選び、どんな雰囲気になりたいのかなど要望を聞く。客先に印稿を見せるかどうかは店の方針によるが、下書きで納得してもらおうと、できあがりの満足度も変わってくるという。印稿が決まれば、布字へ。布



印材を挟んで中心をとり、印面を傷つけずにグリッドが引ける自作の治具。

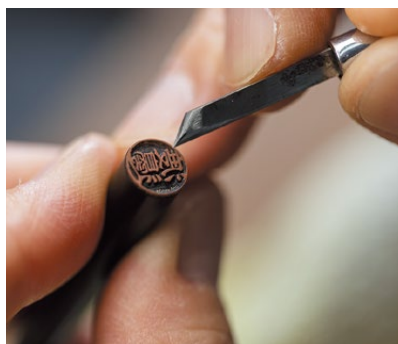
印床(台)に印材を挟んで行う荒彫り。照明で光らないように、印床は黒く塗ってカスタムしている。



朱の印影サンプル(右上,右下)は書体選別に使う。左は明治37~41年までのゴム印の印影。昔はこれを警察署に届け出るのがはんこ店の義務だった。印鑑証明のような役割。



荒彫りができれば印床から印材を外し、仕上げ刀に持ち替えて彫る。



仕上げ彫り。枠から傾斜がつくように彫ると、韌性が高くなってしなるため強度がでる。

手前が仕上げ用、奥が荒彫り用の印刀。先の細い印刀があれば細かな模様も彫ることができる。



字とは印稿を見ながら墨の筆で印面に字入れすることで、頭の中で文字を反転させて書かなければならない。この工程が一番難しく、スキャナーを使用しての機械彫りに移行した店も少なくない。時折、字を鏡に映して見え方やグリッドを確認しながら筆を進め、小さなはんこだと1時間ほどで書き上げる。

布字ができれば、印刀で朱の部分を荒彫りし、仕上げ刀に持ち替えて字のアウトラインを彫る。これを怠るとシャープな線が出ず、押したときにぼやけてしまう。この後、サンドペーパーで印面の朱墨を落として、彫り残しが見える黒墨に塗り替える。朱墨に比べて粒子が粗い黒墨の印面を猪牙<sup>ちよき</sup>で磨きつるにすれば、いよいよ仕上げ彫りへ。何度も紙に押し、印影を確認しては彫り、微調整をくり返す。

### 信頼できる道具が技術、スピードを上げる

現在、京印章の店で完全手彫りは数軒のみ。布字

と荒彫りは機械に頼り、仕上げ彫りだけを行う店が増えたそうだ。完全手彫りは精確な技術力が求められるうえに、生産効率が高くないのも要因だろう。

田中文照堂の5代目は、それでも完全手彫りにこだわり、道具から見直した。工学部出身、店を継ぐ前は重工業の自動車部門に勤めていた氏は、知識を生かして印刀の素材を鋼ではなくハイスピード・スチールで自作。「よく切れて刃こぼれしないので、象牙などの堅い印材を彫るときでも一気に作業を進められます」と話す。字割り用治具も、朱墨の成分を考慮して製図用ディバイダーを改良して作った。「この仕事に就いたのは人より遅いですが、知識と経験を生かした信頼できる道具があるので、うちはずっと手彫りでいきます」。印判師の技、それを支える道具から、今日もすばらしい印章が生まれる。

(取材協力：田中文照堂)

<https://www.bunnshoudou.jp/>

※本記事の無断転載を禁じます。